

近現代台湾をテーマとする学生映像制作の可能性： 集中講義「海外メディア事情」の実践から

一戸 信哉

はじめに

台湾の近現代史において、日本が統治した 1895 年からの 50 年間は、時間的にも内容としても大きなウェイトを占めている。日本は台湾のインフラ整備に注力し、鉄道や道路網の拡充、衛生の向上、教育の普及を進めたとされる。民政長官として公衆衛生や教育制度の改善に尽力した後藤新平、嘉南大圳の建設など水利事業で大きな貢献をした八田與一などの「文官」の活躍も、よく知られている。もちろん、台湾の資源が日本の経済のために利用され、土地や産業は日本人に支配されたという面はあり、文化面では日本文化の浸透により、台湾固有の文化や言語への抑圧もあったといわれる。

日本統治時代に建設された建物は現在も多く残されていて、旧台湾総督府（現總統府）など、台北市内中心部のランドマークのような存在になっているものも多く、その保存もまた台湾の人々の関心となっている。

敬和学園大学では、2023 年 2 月に集中講義型の授業「海外メディア事情（海外研修）」を初めて現地実施し、筆者が授業を担当した。本稿はこの授業の内容をベースとして、台湾での撮影取材を行う授業にどのような可能性があるのかを模索する。これは台湾での授業だけでなく、かつて日本が統治したり、影響下においたりした多くの国・地域においても、ある程度適用可能な先例になると考えられる。2019 年にスタートしたカリキュラムで、この授業は設置されたが、新型コロナウイルスの感染拡大により海外渡航が不可能となったため、もともと隔年開講となる予定だったこの科目を、実際に現地で実現できたのは 2023 年 2 月となった。

1. 学内開講となった 2020 年度の授業実践

今回開講した科目「海外メディア事情（海外研修）」は、2019 年に敬和学園大学人文学部国際文化学科に、情報メディアコースが設置されたのに伴って、開設された科目である。このコースは、ICT やデジタルコンテンツ全般に関心を持つ学生が、「リベラルアーツ」が提供するさまざまな科目を学びつつ、情報メディアに関する理論系の科目、ICT スキルの習得を目指す科目などをバランスよく履修し、メディア社会と技術について実践的に学ぶカリキュラムとなっている。「海外メディア事情」は、各国のメディア事情とともに、さらに進んで、それぞれの地域が持つメディア・コンテンツやその背景について、現地で

学ぶことを目的として設置されている、情報メディアコースの「応用科目」というべき位置づけとなっている。

実際には、2020年からの新型コロナウイルスの感染拡大により、この科目での現地訪問は当面不可能になった。2021年2月の開講予定時期は、海外渡航そのものが事実上不可能な状況となり、学内での開講（一部Zoomを利用したオンライン開講）となった。翌年2022年2月、同じく沖縄での開講を予定した科目も、沖縄県での感染が急拡大した時期と重なったため、大学での開講となっている。2021年2月の授業では、台湾在住作家の片倉佳史氏によるゲスト講義をZoomで実施したほか、台湾のメディア環境、日本による台湾の統治とその痕跡、台湾原住民族と湾生（日本統治時代の台湾出身の日本人）、二二八事件などを学び、その内容をラジオ番組用の内容として収録し、放送した¹⁾。

2. 2022年度研修計画と学内事前研修

2021年に学内で開講してわかったのは、学生の台湾に対する総論的な理解を十分に深めるために、それなりの事前学習が必要だということであった。つまり、事前学習と現地での取材活動を15コマ分の時間の中にどのように配分するかを考慮する必要に迫られた。当初の構想では、台湾の情報流通環境を学ぶ趣旨で、台湾における既存メディアやインターネットメディアの状況を学ぶ部分を多く設定する予定であったが、軌道修正し、2023年度に現地訪問するに当たっては、台湾そのものの歴史、文化等のストーリーに焦点をあて、それらを撮影しながら「自分ごと」化することを念頭において構想を練ることにした。

2022年後半から、新型コロナウイルスの感染状況や、受講生数、日本と台湾、それぞれの渡航制限の状況を確認しつつ、実施の具体的な準備を進めることになった。台湾側の渡航制限は大幅に緩和され、ほぼ制限がなくなったが、日本への帰国に際しては、ワクチン接種証明を用意するか帰国前に現地でPCR検査を受ける必要があり、参加学生の中には、渡航直前にワクチン接種をする学生もいた。また、円安と燃料費の高騰により、台湾への渡航費も大幅に値上がりし、渡航を取りやめる学生が出ることもあった。

こうした事情もあり、当初中5日、6泊7日であった現地滞在計画を短縮し、4泊5日での計画に変更することになった。期間短縮によりとりわけ大きな影響を受けたのが、原住民族が多く暮らす山岳地域と、東部の日本人開拓民の入植地域の訪問であった。山岳地帯でいえば、原住民族セデック族が蜂起した「霧社事件」に関連する史跡は、南投県仁愛郷などに点在しており、台中から車をチャーターしたうえで半日以上の間がかかる²⁾。さらに日本人が入植した地域、新潟県からの入植者が多く居住した村の訪問については、東部の台東市からさらに周辺地域に移動する必要がある。いずれも訪問困難な場所にあるわ

けではないが、台北や高雄など主要都市を拠点に台湾に関する全体的理解を深めつつ、短期間の滞在の中で、こうした地域を訪問するのは困難であると判断することになった。結果的に、台湾高速鉄道（台湾高鉄）で移動可能な西海岸の都市のうち、台北と高雄を拠点にして、訪問できる場所を限定し、旅費を抑えつつ、「日本統治時代の遺構」に焦点をあてて訪問計画を練ることになった。

2023年2月3日、渡航約1週間前に、受講生が集まり、事前研修を行った。まず、日本統治時代に教育を受けた「日本世代」の人々の人生を取材したドキュメンタリー映画及び書籍の「台湾人生」³⁾や、1939年日本時代に制作された国策映画「南進台湾」⁴⁾の内容について、議論を行った。「日本語世代」の人々の人生の中に、日本統治時代の経験がどのように深く刻まれているかを見るとともに、日本に切り離されたことによる「悲しみ」を発見することになった。白黒映画の「南進台湾」の内容の理解は決して容易ではないが、政府が「内地」の人々に向けて、1930年代の終わりに、台湾の魅力を強調してみせていたことが確認された。

その後、各種資料を用いてグループワークを行い、訪問予定である台北及び高雄の日本関係の建築物の状況、さらに南部屏東県にある潮音寺及び牡丹社事件記念公園等について、概要の調査を行った。

3. 台湾での撮影活動について

3-1. 2023年2月実施の台湾での撮影取材先

事前研修の翌々週、2023年2月13日からの台湾での行動概要は以下の通りである。

2/13（月） BR191 羽田ー台北 台北松山空港に到着。現地ガイドと合流後、公共交通機関で台北駅に向かい、その後台湾高速鉄道で高雄・左營駅へ。公共交通機関で高尾駅に移動し、市内ホテルにチェックイン。日没後、美麗島駅、愛河、二二八記念公園などを徒歩で訪問し撮影。

2/14（火） 現地ガイドとともにバスで移動。屏東県にて、潮音寺、鵝鑾鼻公園、牡丹社事件記念公園を撮影・取材。その後高雄市内に戻り、旗津地区の戦争と和平記念公園主題館、旗津砲台を訪問し撮影。日没後再び外出し、「哈瑪星」と呼ばれる地域で、日本時代の建築物を撮影。

2/15（水） 現地ガイドとともに公共交通機関で高雄・左營駅へ向かい、台湾高速鉄道で台北移動。その後、台湾総統府（外観のみ）、中山堂、西門紅樓、新富町文化市場、圓山

大飯店、剥皮寮歴史街区を訪問。台北市内泊。

2/16（木） 公共交通機関で自主行動。順益台湾原住民博物館、台湾原住民文化主題公園、二二八和平公園、国立台湾博物館（外観のみ）、台北二二八紀念館を訪問。台北市内泊。

2/17（金） BR192 台北ー羽田 羽田空港に到着。

日中はほぼ自由時間を設けずに、撮影を行った。ゲスト講義の依頼もしていたが、スケジュールの都合がつかず、現地ガイドの解説を受けながら各地を訪問し、撮影を行った。スケジュールの自由度を上げることができたため、多くの場所で撮影を行うことができた。ただし、台南、台中など台北ー高雄間の都市、さらに、基隆、宜蘭、花蓮といった高速鉄道の路線から外れた地域への訪問は、不可能であった。

以上が、4泊5日の旅程の中で訪問した場所であるが、この経験をベースとして、学生が日本統治時代を中心とする台湾の近現代をいかに学び、映像コンテンツにまとめることができるか、以下に詳細を記述する。

3-2. 台北を中心とした北部台湾

台北は、台湾の「臨時首都」であり、日本統治時代の台湾においても中心都市であったことから、日本統治時代の遺構も、建築物として多く残されている⁵⁾。短期間の滞在では、これらすべての遺構を訪問することは不可能であるが、2023年2月に訪問した場所を中心に、学生によってどのような作品が生み出されうるか、その可能性を検討する。

3-2-1. 中山堂（旧台北公会堂）

中山堂は、旧台北公会堂として、昭和天皇の即位を記念して建造が発議され、1936年に竣工している。台湾総督府技師であった井出薫が設計を担当した。日本統治時代の写真や映像の背景にもよく登場しているほか、台湾地区の日本の降伏受諾式典もここで開かれている。ただし内部の展示内容を見ると、日本時代を思わせるものはあまりなく、「歴史の目撃者」としての中山堂を強調する展示においても、国民党の統治以後の台湾についてのみ紹介されていた（写真1）。現在「中正庁」と名付けられている大ホールは、2023年2月の訪問では、立入禁止となっていた。さらにこの中山堂の向かい側には、「抗日戦争勝利暨台湾光復紀念碑」（抗日戦争勝利及び台湾光復紀念碑）が設置されている。日本時代の建築として中山堂内部を見学した後、外に出てこの紀念碑を見ると、あえて中山堂の向かい側にあるこの場所に、紀念碑を建てているようにも見えてくる（写真2）が、そ

の意図は明らかではない。

また中山堂の敷地内には、孫文像が設置されているが、建物から少し離れていて、あまり目立たない。この銅像の台座はかつて日本時代には、祝辰巳民生長官（1906年11月 - 1908年5月在任）の銅像が設置されていたものであるという（写真3）⁶⁾。

「台北公会堂」は、建設当時、東京、大阪、名古屋につぐ大きさを誇る公会堂⁷⁾であった。日本政府の台湾統治への力の入れようを象徴する建物のひとつとして、その歩みを映像にまとめることはできそうだが、展示物からこれを描き出すのは容易ではなく、十分な資料収集ののちに、現地を取材する必要がある。



写真1：1954年から始まる中山堂の「歴史」。筆者撮影。



写真2：中山堂の向かい側に設置されている、抗日戦争勝利暨台湾光復紀念碑。筆者撮影。



写真3：台北公会堂前の孫文像。日本統治時代、祝辰巳民生長官の銅像が設置されていた台座が流用されている。筆者撮影。

3-2-2. 西門紅樓

西門紅樓は、旧公設西門町食料品小売市場で、上から眺めると正八角形をしている。かつては「八角堂」と呼ばれていた。台湾総督府技師であった近藤十郎が設計し、1908年に竣工しており、終戦までは、台北を代表する市場であったとされる。「若者の街」とさ

れている西門町に近い位置にあり、週末には敷地内でフリーマーケットが開かれて、この場所も若者で賑わうという。

今回、事前研修のグループワークの中で、西門町が若者の街であるという認識は、参加学生の間で共有されており、したがってこの地域への関心は高かった。西門紅樓の建物を十分に撮影することはできなかったが、この街の新旧を際立たせる撮影は、工夫次第で可能になるであろう。

3-2-3. 新富町文化市場

新富町文化市場は、観光客にもよく知られている寺院「龍山寺」の近く、台北市萬華区にある。市場自体は1921年に開設されているが、現在の建物は、1935年に建てられたものである。馬蹄形のユニークな構造になっていて、真ん中の空間が写真撮影スポットとして人気がある。新富町というのは、日本時代の町名で、台北の地名として公式には使われていないが、施設の名前として残されている。2017年に修復工事が行われたあと、公共空間として整備された。

すでにこの空間は「市場」としての機能を持っていないが、実際には隣接した場所に「新富市場」という屋根付きの市場が現在も設置されている。活気ある市場の風景を撮影したあと、この市場の前史について展示し、解説する文化市場を訪問し、撮影することは可能であろう。また中国語を解する通訳等を交えて、「新富町」の「今昔」を撮影する可能性もある（写真4）。

3-2-4. 剥皮寮歴史街区

新富町文化市場のほど近くに、清国時代の町並みが残る地域、「剥皮寮歴史街区」がある（写真5）。台北市内では、多くの地域で、日本による都市計画が進められたため、清国時代の町並みはほとんど残っていないとされているが、奇跡的にその痕跡を留めたのが、この地区である。2009年8月に修復工事を行って、歴史建築保存地区となった⁸⁾。

レンガ造りの建物が並ぶ通りは、展示スペースとなっており、いくつかの展示物を見た限りでは、周辺地域に残る老舗の古い写真などが展示されていた。町並みとしては清国時代のままではあるが、建物に関しては日本統治時代のものや戦後のものが混在しているという。

この地区は、2023年2月の訪問前、事前の検討ではリストアップされていなかったが、新富町文化市場を訪問した際に、現地ガイドのすすめによって、立ち寄ることになった。新富町文化市場とともに訪問することにより、歴史的建造物を文化施設として活用する事例として、一体的に取材撮影することは可能になる。同時にこの地域で活躍するアーティ

ストへのインタビューを実施することが望ましいともいえる。

3-2-5. 旧朝北医院

萬華区を車で移動中に見かけた歴史建築が、この旧朝北医院である。通りに面したこの建物は、正面上部に欧風の装飾を施すと同時に、いわゆるアーケードに相当する亭仔脚を備えているのが特徴である。この亭仔脚は、1939年の国策映画「南進台湾」においても、「灼熱の太陽、突然の雨にも耐えられる文化的な建築様式」として紹介されている。台湾の現代建築においても、同種のアーケードは存在しているが、日本統治時代の面影を残す建物は数少なくなっており、ぜひ撮影すべき素材であろう。

3-2-6. 順益台湾原住民博物館

台湾の原住民族についての理解を深めるには、各民族が暮らしていた山間部の自然環境を体感できる場所を訪問することが望ましいが、短期間の滞在では、台湾で暮らす多様な民族の生活様式を現地でひとつずつ体験するのも難しい。この点で、台北市内で代替手段となるのが、士林区で、故宮博物院の近くにある、順益台湾原住民博物館である⁹⁾。

「順益」は、三菱自動車などの販売代理店となっている地元企業グループで、オーナーの林清富氏が博物館の理事長をつとめている。原住民族の居住地域の自然の特徴、各種族についての解説、生活、服飾、信仰などを4フロアに渡って展示し、民族ごとの衣装の特徴や生活スタイルなどを展示している。鼻笛、首狩りなどの風習にも触れてはいるが、異質性をことさら強調することは避けているように思われる。

2023年2月の訪問では、参加学生全員が日本語オーディオガイドを使って全館をまわり、理解を深めた。博物館の向かい側にある原住民主題公園には、多様な民族の姿を彫ったレリーフが展示されており、これもあわせて訪問することにより、理解を深めることができる(写真6)。



写真4：新富町文化市場の内部。筆者撮影。



写真5：剥皮寮歴史街区のレンガ造りの建物。補強して利用されている。筆者撮影。



写真6：原住民主題公園。多様な民族の姿を彫ったレリーフ。筆者撮影。

映像作品として制作することを考慮すると、原住民族が暮らしてきた山間部を撮影するかどうかは、作品の完成度に大きく影響するが、事前学習の機会として、台北市内のこの博物館の訪問は有効であろう。

3-2-7. 二二八和平公園

台北中心部にある二二八和平公園は、もともと台北新公園と呼ばれていて、1908年に開設されている。新公園という名称は、1996年まで用いられており、その後、当時台北市長であった陳水扁氏により二二八和平公園と改名され、二二八和平記念碑が建立されている。また公園の中にある、旧台北放送局を台北二二八記念館とした（写真7）。

命名の由来となった二二八事件は、1947年、専売品であったタバコを闇で販売していた女性が、専売局の取締で殴られて怪我をしたのがきっかけで、民衆による抗議運動に発展した事件である。このときに、デモ隊がラジオ局を占拠し、抗議運動が全国に広がっていくことになった。この抗議の背景には、国民党が、日本統治時代から台湾で暮らしていた「台湾人」を政府要職から排除したこと、タバコ、酒、製糖などの事業を政府が独占したこと、軍や警察の規律が乱れていたこと、などがあつたとされる。これがきっかけで、国民党による「白色テロ」と呼ばれる弾圧が行われ、多くの人々が犠牲になり、長い戒厳令の時代が続くことになる¹⁰⁾。

この公園は、現在、二二八事件との関連性が強調された公園になっているが、日本統治下の1908年に開設されたものであることから、公園内には日本統治時代から残された建物等も多く残されている。国立台湾博物館や台北二二八記念館はもちろん、石灯籠、ラジオ塔（写真8）などがこれにあたる。



写真7：旧台北放送局、現在の二二八記念館。筆者撮影。



写真8：かつてラジオ放送を流すために使われたラジオ塔。筆者撮影。

この広大な公園内を歩くと、各種のモニュメントを撮影するとともに、二二八記念館や台湾博物館を訪問することができ、長い時間をかけて調査をし、撮影をすることができる。2023年2月の訪問では、すでに多くの場所を訪問したあとであったため、撮影・取材を行う範囲は限定された。また、二二八記念館の展示内容は、二二八事件が起きた背景を丁寧に伝えているが、予備知識の少ない日本人にはやや理解が難しいように思われた。この

点では、十分な事前学習が必要となるだろう。

3-2-8. 全祥茶荘

二二八紀念公園のほど近くにある全祥茶荘の入る建物は、かつて時計台のある和泉時計店台北支店であった¹¹⁾。2023年2月の訪問時には発見できなかったが、この建物の上部には尖塔があり、ここにかつて大時計が入っていたという。現在はこの時計はなくなっている。1897年創業の時計店の建物が、別の形で現在も使われており、全祥茶荘も台湾茶販売の老舗として知られているため、これらを組みわあせた撮影が可能であろう。

3-2-9. 台湾基督長老教会済南教会及び中山教会

台北市内には、日本統治時代に建てられた教会が、現在も残されている。たとえば中山南路にある赤レンガづくりの台湾基督長老教会済南教会は、かつて旧日本基督教団台北幸町教会であったという¹²⁾。設計は、台湾総督府の技師であった井手薫である。日本語で書かれた銅製「竣工記念碑」が残されており、「教会は基督の体なり。愛は衆徳の帯なり。」と記されているという。また、同じく台湾基督長老教会の中山教会は、旧日本聖公会台北大正町教会である¹³⁾。礼拝堂は1927年に建てられ、1937年に改築されている。

日本の統治下にあった台湾において、日本基督教団や日本聖公会が建築した教会が、その後台湾の長老教会として使われているというのは、あまり知られていない事実であろう。こうした「継承」の歴史をどのように表現するか、キリスト教に関心のある学生にとっては、興味深いテーマとなると考えられる。

3-3. 高雄及び屏東県

高雄は、台湾南部の中心都市で、日本統治時代に急速な発展を遂げて、台湾第二の都市として発展している。日本は「南進基地」としての高雄港の開発を行い、北部基隆に次ぐ第二の港湾としている。今回の撮影取材においては、日程短縮の影響により、台北以外の都市の中で比較的利便性がよい場所として消極的に選択した面もあった。そのため、以下に述べるように、屏東県で重要な施設訪問を実現することができた一方で、高雄市内の日本統治時代の痕跡については、完全には網羅できなかった。

3-3-1. 潮音寺¹⁴⁾

潮音寺は、屏東県恒春鎮猫鼻頭にある寺院で、1981年に建立された。この寺院は、太平洋戦争において、南方に向かう輸送船の多くが撃沈されたバシー海峡近くに、輸送船で亡くなった人々を慰霊する目的で設立されている。撃沈された輸送船の一つ、「玉津丸」

に乗っていた、元通信兵、中嶋秀次氏が、私財をなげうって、日本各地からの寄付と合わせて設立したものである。潮音寺は、戦没者の追悼とともに平和への願いを込めて、毎年バシー海峡戦没者慰霊祭を行っている（写真9）。

今回の訪問は、日本の旅行会社を通じてガイドと車を手配し、寺院を撮影するための手続きをとった上で実施した。そのため、高雄市内のホテルから2時間ほどかかったが、スムーズに取材を行うことができた。事前学習によって背景を一定程度理解した上で訪問し、現地ガイドからの説明によって補足することができたため、参加学生が趣旨を理解した上で撮影し、作品として制作することができた。



写真9：潮音寺外観。筆者撮影。

3-3-2. 牡丹社事件記念公園¹⁵⁾

牡丹社事件は、1874年に屏東県牡丹郷で起きた台湾先住民族と日本兵との衝突事件であり、この記念公園はその歴史を伝え、和解の象徴として設立されている。1874年、日本は西郷従道率いる3,600人超の兵士を送り、現地「牡丹社」の先住民族パイワン族の村を攻撃している。そのきっかけとなったのは、宮古島の船が遭難して台湾に漂着、乗組員66人中の54人が、現地の村人に殺害された「琉球漂流民殺害事件」である。当時琉球への支配を強めていた日本は、宮古島が自国領であり、宮古島民が自国民であることを示すとともに、台湾についても清王朝の支配が及んでいないことを示す目的もあり、積極的に軍隊を派遣したと考えられる。

牡丹社事件記念公園は、屏東県の車城という町から199号線で牡丹郷に向かっていく途中にある。途中、温泉地として知られる四重溪の町を通過する。公園内には記念碑や像などの屋外展示が設置されており、中でも事件で犠牲になった先住民族の人々を追悼するためのモニュメントが目を引く。2022年5月に設置された新しいモニュメントは、日本軍との戦闘で戦死したパイワン族の頭目 aruqu 父子の像である（写真10）。199号線沿いには、牡丹社事件の主要な舞台の一つである「石門古戦場」があり、こちらにも大きなモニュメントが設置されているが、今回は時間の都合で割愛することになった。199号線

を登りきったところには、牡丹水庫（牡丹ダム）があり、牡丹社事件故事館が、2021年10月に設置されている。2023年2月時点では、週末のみの開館となっており、内部の見学は叶わなかった（写真11）。

199号線から車城に戻ってくる途中で、「大日本琉球藩民五十四名墓」を発見し、訪問することができた（写真12）。ガイドブックによると、車城から2キロほどの位置にある。199号線に案内看板は出ているが、場所はわかりにくい。犠牲となった人々を、現地の人々が土饅頭の下に埋葬していたところ、出兵してきた西郷従道ら日本軍が石造りの墓を建立したとされる。犠牲となった宮古の人々の頭蓋骨は、のちに沖縄に持ち帰られて、那覇市内に埋葬されており、現在も「臺灣遭害者之墓」という墓地が残されている。

牡丹社事件記念公園については、2023年の訪問では、猫岩頭の潮音寺への移動の後、高雄市内に戻る途中で立ち寄るルートとなった。ただ高雄市内から直行する場合にも車で2時間程度の所要時間となっている。



写真 10：牡丹社事件頭目 aruqu 父子像。筆者撮影。



写真 11：牡丹社事件故事館。筆者撮影。



写真 12：大日本琉球藩民五十四名墓。筆者撮影。

3-3-3. 哈瑪星 (ハマシン)

台湾高雄市南部に位置する港湾地区西子湾駅付近には、「哈瑪星 (ハマシン)」と呼ばれる歴史保存地域が存在する。哈瑪星地域は、高雄港に隣接し、港に直結する鉄道駅が存在しており、現在もその鉄路が残されている。「哈瑪星」という地名は「濱線 (はません)」という鉄路の日本語名からきている。

哈瑪星地域には日本統治時代から残る建築物が保存され、現在鉄道博物館となっている初代高雄駅、かつて書店の「山形屋」であった赤レンガ作りの建造物などが知られている。今回は、日中に、他地域への訪問スケジュールを組んだことで、高雄市内にあるこの地域への訪問は夜となり、撮影を十分に行うことはできなかった。哈瑪星の周辺地域は、歴史的建造物の保存と活用のため、高雄市が開発を進めている地域で、赤レンガ倉庫にショッピング施設が入る「駁二芸術特区」が成功例としてあげられている。商業地域としての位置づけもあり、受講した学生の関心も高かった。事前学習も行った上で、この地域の「新旧」を取材する価値があると考えられる。

3-3-4. 高雄市内旗津地域：戦争與和平紀念公園主題館及び旗后炮台

哈瑪星のある鼓山地区の対岸にある細長い島が、旗津である。ここは台湾海峡に面した細長い島であり、高雄市の市内からは連絡船や海底トンネルを使って訪問できる。また、旗津は観光地としても魅力的で、新鮮な海鮮料理を求めて、多くの観光客が訪れる。今回の訪問では、船を用いずに、屏東県に移動した車が高雄に戻る際に立ち寄り、戦争與和平紀念公園主題館（戦争と和平紀念公園主題館）、旗后炮台、馬雅各紀念碑を訪問することができた。

戦争與和平紀念公園主題館（戦争と和平紀念公園主題館）は、旗津半島の中央部に位置し、戦前に日本兵として、戦後に中華民国兵として戦地へ出征した人々の慰霊を目的として設置された。外壁には、「台湾日本兵」「国府軍兵」「人民解放軍兵」の3つの肖像が描かれ、内部にも同様の展示がなされている（写真13）。時代に翻弄された台湾出身の兵士たちの運命を象徴するこの3つの肖像とともに、この兵士たちのたどった数奇な運命についても解説されている。日本軍に参加した台湾出身の兵士たちは、のちに国共内戦で国府軍に招集されて中国大陸で戦い、さらに捕虜となったのち人民解放軍に徴用されて、朝鮮戦争に従軍したのものもいたという。建物の外には、「台湾歴代戦没将士英霊紀念碑」や「台湾無名戦士紀念碑」が設置されている。



写真 13：戦争與和平紀念公園主題館。筆者撮影。



写真 14：旗津星空隧道。筆者撮影。



写真 15：馬雅各紀念碑の説明ボード。筆者撮影。



写真 16：馬雅各紀念碑のモニュメント。筆者撮影。

旗后炮台は、旗后山の山頂に築かれた砲台で、高雄港防衛を目的として清朝が建設している。その後も、日本統治時代を経て現代に至るまで、多くの歴史の変遷を経験しているが、清朝時代の様式が一部守られている。この砲台の下、旗後山をくり抜いて日本軍が設けたトンネルを活用しているのが、「旗津星空隧道」である。トンネル内には、十二星座のイラストや漂流木、蓄光石などが飾られているほか、LEDによる照明もあって、観光

客に人気がある（写真 14）。この隧道を抜けた先には、小さなスペースがあり、日没時には夕日を楽しむことができるという。

旗津星空隧道の先の小スペースに設置されているのが、スコットランド宣教師マックスウェルを記念した、馬雅各紀念碑である（写真 15 及び 16）。ジェームズ・マックスウェル（James Laidlaw Maxwell、馬雅各）は、スコットランド出身の医師で、英国長老教会の派遣により、1865 年 5 月、高雄に上陸、その後台南を拠点に医療伝道を行った。当時清朝は、台湾統治の拠点を台南においていたため、マックスウェルも台南に移動したが、地域住民から激しい反発を受けて、一時高雄に退避した時期もある。2023 年 2 月の訪問の際には、隧道を通る人々は多かったが、馬雅各紀念碑に注目する人はほとんどいなかった。マックスウェルの関わった建物などは、高雄には残されていないが、台南にはマックスウェルが 1865 年に建てたという教会「太平境馬雅各紀念教会」が残っている。

4. 学内上映会の開催

滞在中に撮影した映像は、できるだけ映像作品として提出することを求めたが、全員が初めて台湾に渡航したという背景もあり、ブログプラットフォームの note の記事として公開できるようにまとめる内容と最終的に動画として提出するものを暫定的に提出してもらった上で、これらを成果物として確認し、単位認定を行った。今回履修した学生は 2 年生と 3 年生であったため、翌年度も映像の手直しを指示し、2023 年度の 6 月に映像の上映会を行った（写真 17）。5 人の学生が、二二八和平公園、台北二二八紀念館、潮音寺、旗后炮台、順益台湾原住民博物館を、それぞれ映像作品としてまとめることができた。



写真 17：上映会ポスター。参加した学生による制作

おわりに：今後の課題

2022年度の台湾での授業実施では、現地取材によって5本の映像作品を制作することができた。しかし、近現代台湾、とりわけ、日本統治時代との関わりをテーマとする作品の制作においては、十分な成果を得たとは言いがたい。台湾の歩んだ複雑な歴史と現状について、学生が、関心と理解を深めていないわけではないが、さらに高いレベルの成果を出すための課題を挙げてみたい。

まず、事前学習については、教室に集まる前に事前課題を出すなどの工夫により、渡航前の理解レベルを上げる必要が感じられた。ある程度の基礎知識を高めた上で、現地での取材テーマの確定や映像の構成まで考える時間を設け、さらに事前に取材対象にアポイントメントを取ることが望ましい。

また、現地訪問時の撮影は実施されたものの、滞在中に作品を完成させる時間は不足している。その結果、映像編集は帰国後に行われたが、学期末に実施する関係上、メンバーが集まって検討する時間をとるのは難しい。結果編集作業は年度をまたぐこととなり、参加学生のモチベーションに影響が出るのは避けられなかった。モチベーションを維持するために、上映会を実施することも一定の役割を果たしていたとはいえ、さらなる工夫が必要である。帰国後の自主的な課外学習として、さらに調査を深める課題設定も可能ではあるが、学期をまたいでもう一科目別の科目を設定して、振り返りそのものをテーマとする授業を設定することも検討すべきであろう。

最後に、歴史学や地理学などの共通基礎科目その他との連携の重要性も挙げておきたい。今日の映像制作は、スマートフォンだけで行う比較のカジュアルなものが増えているが、制作者の予備知識の有無により、内容の深度に差が現れる点は否めない。ベースとなる基礎知識の底上げには、事前学習の機会をもうけるだけでなく、関連する授業との連携を明確にした上で準備を進めることも重要になるだろう。

註

- 1) 敬和キャンパスレポ Vol.75 20210312 台湾特集1「海外メディア事情」より< <https://note.com/keiwacampus/n/n14a832eb946a> >
敬和キャンパスレポ Vol.80 20210416 台湾特集2「海外メディア事情」より< <https://note.com/keiwacampus/n/na8fbb6f5e99d> >
敬和キャンパスレポ Vol.84 20210514 台湾特集3「海外メディア事情」より< <https://note.com/keiwacampus/n/n797559feb050> > (2024年1月30日確認)
- 2) 拙稿「台湾におけるダークツーリズム：『霧社事件』関連施設を中心に」敬和学園大学研究紀要 30号(2021年)、10頁。
- 3) 酒井充子『台湾人生』(文藝春秋、2010年)
- 4) 映画について、拙稿前掲論文、3頁。
- 5) 台湾在住作家の片倉佳史は、2019年に出版した『台北・歴史建築探訪』を2023年に改訂し、

- 350 件の建築物を紹介する増補版を出版している。片倉佳史『台北・歴史建築探訪 増補版』(ウェッジ、2023 年)
- 6) 片倉前掲書、27 頁。
 - 7) 片倉前掲書、26 頁。
 - 8) 片倉前掲書、85 頁。
 - 9) 順益台湾原住民博物館 < <https://www.museum.org.tw/> > (2023 年 9 月 30 日確認)
 - 10) 片倉前掲書、50-51 頁。このほか、館内で販売されている案内冊子の日本語版に詳しい解説がある。台北市文化局『台北二二八記念館常設展 改訂版』(台北市政府文化局、2018 年)
このほか、財団法人二二八事件記念基金会の二二八国家記念館は、企画展のオンライン公開に積極的に取り組んでいる。二二八国家記念館 < https://www.228.org.tw/jp_index.php > (2024 年 1 月 30 日確認)。
 - 11) 片倉前掲書、66 頁。
 - 12) 台北済南基督長老教会 (台湾宗教文化地図 - 臺灣宗教百景) < https://taiwangods.moi.gov.tw/html/landscape_jp/1_0011.aspx?i=11 >
片倉前掲書、178 頁。
 - 13) 中山基督長老教会 - 台湾宗教文化地図 - 台湾宗教文化資産 < https://taiwangods.moi.gov.tw/html/cultural_JP/3_0011.aspx?i=213 >
片倉前掲書、242 頁。
 - 14) 拙稿前掲論文、17 頁。片倉佳史「『台湾人元日本兵』を弔う公園を訪ねる」(nippon.com) < <https://www.nippon.com/ja/column/g00545/> > (2024 年 1 月 30 日確認)
 - 15) 平野久美子『牡丹社事件 マブイの行方 - 日本と台湾、それぞれの和解 - 増補版』(2021 年、集広舎)